

15  
(日)

## 神に身をゆだねて

詩編一一編

主は聖なる宮におられる。主はその座を天に置かれた。その目は見つめる。そのまなざしは人の子らを調べる。(4)

詩人は敵対する者たちに攻撃され、身の危険にさらされてきました。このため彼の友人たちは逃亡を勧めました。しかし、詩人はその勧めを断り、神の裁きに身を委ねる決断をしました。神は天から人の子らを見渡し、義人と悪人とを正しく裁かれると信じていたのです。このため、他の一切のものに寄り頼むことをやめ、ただ神にのみ信頼しました。たとえどんなに暗雲が低くたれ込めようとも、神のまなざしはその分厚い雲を貫いて、信仰をもって神を仰ぐ者たちに届いているからです。「私は山々に向かって目を上げる。私の助けはどこから来るのか。私の助けは主のもとから。天と地を造られた方のもとから」(詩篇一二一一、2)。私たちも思わず天を仰ぎたくなるようなとき、視線の先に神がおられ、神が私たちを見つめておられることを思い起こそうではありませんか。